

現代中国語における方向補語“来”“去”の用法に関する一考察

—主観的事態把握と「遠/近」の整列対応の観点から—

On the Usages of Directional Complement “*lai*” “*qu*” in Chinese -From the View Point of “Subjective Construal” and “Far/Near” Alignment-

韓涛†

Han Tao

Abstract This paper discusses about the usages of Chinese directional complement “*lai*” “*qu*” from a cognitive approach. When we conceptualize the external world using directional complement, “*lai*” can only be replaced by “*qu*” in some cases. It means that the usage of “*lai*” and “*qu*” cannot be described well only using the term of “viewpoint” just as traditional approach does. This paper focuses on the cases that “*lai*” “*qu*” cannot be replaced by each other and discusses the constraint by the concept of alignment proposed by Nabeshima 2003. We can draw a conclusion that the selection of “*lai*” or “*qu*” reflects the Subjective Construal.

1. はじめに

現代中国語における方向補語“来”“去”の用法には、自由に置き換えられる場合（例（1））と、置き換えが認められない場合（例（2））がある。

- (1) a. 走进来/去 [歩いて入ってくる/いく]
- b. 跳上来/去 [跳んで上がってくる/いく]
- (2) a. 醒过来/*去 [目覚めてくる/*いく]
- b. 昏过去/*来 [気を失っていく/*くる]

このような言語事実は、方向補語“来”“去”の用法が単純に視点の置き方の問題に還元できないことを意味している。つまり視点の問題以外に、さらに何らかの制約が存在すると考えられる。本稿の目的はこの種の制約が何であるかを明らかにすることである。

具体的には、方向補語を用いて外界における様々な事態を言語化する際に“来”が選ばれるが、“去”は選ばれないケース（例（2a）参照）、もしくはその逆のケース（例（2b）参照）を取り上げて考察し、中国語話者の

事態に関する自己中心的な (egocentric) 把握の仕方が“来”“去”の用法を制約していること、言い換えればこの種の現象には中国語話者の主観的事態把握が反映されていることを主張する¹。

なお考察に際し、本稿では鍋島 2003 で提案された「遠/近」の整列対応という概念を援用する。次節ではまず鍋島 2003 を踏まえて、整列対応の定義とその具体例の一つである「遠/近」の整列対応について確認しておく。

2. 整列対応の定義と「遠/近」の整列対応

2・1 整列対応の定義について

整列対応 (Alignment) という概念はもともと (認知) 心理学の用語である。しかし、ここでいう整列対応 (または整列効果、整列、アラインメント/Alignment) は心理学のそれとは異なり、いわゆる「言語学的アラインメント」と呼ばれるものである。以下の記述から分かるように、鍋島 2003 は整列対応を「2 つ以上の軸/線條構造」の間の写像であると定義している。

† 愛知工業大学 基礎教育センター (名古屋市)

Alignment という名詞形の派生の元となる動詞 Align とは、「線にする」ことであるが、本稿では、2 つ以上の軸/線条構造がどのように対応づけられるかを言語との関わりから論じ、この対応づけをアラインメントと呼ぶことにし、場合によっては「アラインする」という用語も用いる。

(鍋島 2003 : 79 下線は引用者による)

2・2 整列対応の具体例—「遠/近」のケース

鍋島 2009 : 601 は「遠/近」の知覚と視覚の整列対応を図 1 のように示している (図 3 も併せて参照)。

遠近	大きさ	濃淡	肌理 (きめ)	配置	移動	移動速度
遠い	小	薄	密	上	小	遅
近い	大	濃	粗	下	大	速

【図 1】 遠近と視覚の整列対応 (鍋島 2009)

即ち、ある特定の視点を選んだ認知主体にとって、比較的遠くにあるものは近くにあるものに比べ、大きさの面や濃淡の面ではそれぞれ上段の特徴が顕在化する。

また、「遠/近」の知覚と視覚の間にみられるこの種の整列対応は言語表現のレベルにも反映されている。

- (3) a. 遠く見える b. うっすらと見える
 c. ぼんやりと見える d. 小さく見える
 e. 僅かに見える f. 微かに見える

(鍋島 2009 : 601)

例えば例 (3) に示される (a) ~ (f) のうち、「遠い」という意味合いを表すことができるのは例 (3a) だけではない。即ち、上の図 1 に基づいて考えれば、例 (3b) ~ (3f) のいずれも「遠い」の意味合いを表しているのが分かる。

ここで注意すべきことは、視覚的要素以外に、図 2 が示すように「遠/近」に関する知覚はさまざまな抽象的概念とも対応していることである。

遠近	上下	前後	時間	現実
遠	上	前	未来	未現実
近	下	ここ	今	現実

【図 2】 上下・前後・時間・現実・非現実の整列対応 (鍋島 2009)

この点について鍋島 2009 では以下のように述べている。

人間の身体は、ほとんどの動物と同様、知覚器官が進行方向に面して配置されているため、視

野が進行方向と合致している。

(中略) さらに、人間の移動では、自分の足元がメトニミー的に現時点を指し、視界の中心よりやや上方が未来の方向を示す。自己の移動の経験の中で前と未来は自然に結びつく。ここにおいて、Lakoff and Johnson(1980)で述べられた《近い未来は上》に対応する「下」は、「過去」ではなく、《現在は下》であり、その基盤(動機づけ)は S モードにおける上下と前後の対応関係であることが判明する。さらに「今・ここ」である現時点が現実と考えられ、それ以外すべてが非現実となり、前方は、未来の非現実領域(未実現)となる。

(鍋島 2009 : 602)

なお、この種の整列対応を反映する具体例として以下のようものが挙げられる。例 (4) は《未来は上》、例 (5) は《現実下》、例 (6) は《理想は上》、例 (7) は《可能性は濃淡》の具体例である。

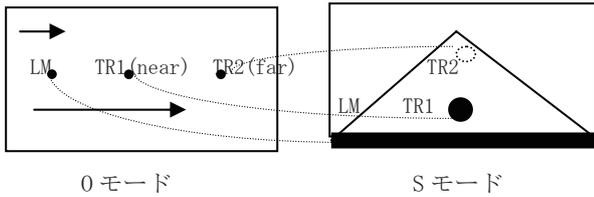
- (4) What' s coming up this week?
 (今週は何がもち上がるのか→今週は何があるの?)
 (5) きちんとした仕事をする人は単なる憧れを持っているだけでなく地に足がついている。
 (6) ぼくは理想が高いんです
 (7) a. うっすらとした可能性 b. 疑いが濃い
 (例(4)-(7)は鍋島 2009 から引用 体裁は引用者による)

3. 方向補語“来”“去”の用法と主観的事態把握

本節では第 2 節でみた整列対応の概念を援用し、方向補語“来”“去”の用法からみた中国語話者の主観的事態把握について考察するが、その前にまず“来”“去”と関連性を持つ「遠/近」のイメージ・スキーマについて鍋島 2009 を踏まえてみる。

3・1 「遠/近」のイメージ・スキーマと“来”“去”

鍋島 2009 は、主観的事態把握の観点から「遠/近」のイメージ・スキーマの S モード、O モード、及びその対応関係を図 3 のように示している²。



【図3】 「遠/近」の0モードとSモードの対応関係

図3に示される「遠/近」のSモードは、そのまま中国語方向補語“来”“去”の用法にも適用されると考えられる（ただしその際に、TR1とTR2は時間軸に沿った同一事態である点に注意してほしい）。つまり、TR2という事態が遠くから観察者（LM）に向かって移動してくる過程のある時点でTR1に変わるというプロセスが“来”のそれと一致し、逆にTR1という事態が観察者のそばから遠くに移動する過程のある時点でTR2に変わるプロセスが“去”のそれと一致するということである。このように観察者（ないし認知主体）が常に自己中心的な立場（図3（Sモード）のLM）から外界における事態（TR1、TR2）を眺め、言語化するのであれば、ある事態が観察者のそばに近づいてくるものとして捉えるのか、それとも観察者のそばから遠ざかるものとして捉えるのかは、言語話者の主観的事態把握に委ねられることになる。

以下、認知主体の取る自己中心的な立場を「認知主体の領域」と呼び、方向補語“来”“去”の用法に関する分析を通して、認知主体に属するこの領域とそれ以外の領域とはどんな領域であるのか、とりわけ認知主体の領域とはどのような特質を持つ領域であるのかを明らかにする。

3・2 “来”“去”の用法からみた認知主体の領域の特徴

3・2・1 「知覚できることは認知主体の領域」

- (8) a. 安娜心里难过极了，眼泪禁不住簌簌地流了下来。
（→*去）
[アンナは悲しみのあまり、思わず涙がはらはらと流れ落ちた。]
- b. 寒气无孔不入地直逼他全身，他居然打起哆嗦来。
（→*去）
[寒気があらゆるところから襲ってきて、彼は思わず震えはじめた。]

図1に示した「遠/近」の知覚と視覚の整列対応及び図3に示した「遠近」のイメージ・スキーマのSモードからも分かるように、問題となるものが認知主体の領域に近づいてくれば、我々はその輪郭、濃淡や肌理などは

つきりと把握できるが、逆に認知主体の領域から離れていく場合、そういった把握は難しくなる。言語レベルにおいて、外界における様々な事象（例えば例（8a）の「涙が零れること」や例（8b）の「身体が震えること」）を視覚で捉えた場合、“来”が用いられる。一方、視覚で捉えられない場合には、そもそも言語化する必要がないため、このようなケースでは決して“去”が用いられることはない。

3・2・2 「物理的操作のできることは認知主体の領域」

- (9) a. 库珊急忙拿笔在笔记本上记下来。（→*去）
[庫珊は急いでペンを取り出してノートに記した。]
- b. 这是一张鸟瞰图，仿佛是一幅坐在飞机里拍摄下来的照片。（→*去）[これは一枚の鳥瞰図であり、まるで飛行機の中から撮った写真のようだ。]

例（9）では、認知主体の領域が「物理的操作のできることを」表している。例えば例（9a）の“在笔记本上记下来”、即ち「ノートに何かを記す」という事態には、中国語話者の主観的事態把握により、“下”と“来”が付与されている。このときの“下”は杉村1983:106-108によれば“遗留”[残す]を表すとされており、“来”は「記したものが認知主体の領域に近づいてくることを」表しているといえる。

そして注意すべき点は、このときの“来”は“去”に置き換えられない点である。なぜなら、近くにあるものに関しては、我々はそれを手に取って眺めたり、物理的な操作を加えたりすることが可能であるが、遠くにあるものに対してはなかなかできないからである。つまり、例（9a）についていえば「ノートに記せば、その記したものに」対して視覚で捉えたり、記憶したり、或いは間違ったところを書き直したりといった物理的な操作が可能となる。同様に例（9b）の場合には「風景」そのものを移動させるといった操作は不可能であるが、「写真に写せば」他人にみせたり、カバンに入れたりといった操作が可能となる。以上のようなことを反映する形で言語レベルでは“去”ではなく“来”が用いられるのである。

- (10) a. 孔太平上街找了一处小饭馆要了一碗肉丝面和一瓶啤酒，三两下就吃下去……（→*来）
[孔太平は街に出てある小さな食堂に入って肉入りうどんとビール一本を注文し、それをすぐさま食べてしまった…]

b. 话到了嘴边, 她又把它吞了下去 (→*来)

[言葉が喉元まで出かけたが、彼女はそれをまた飲み込んだ]

例 (10) では、認知主体以外の領域が「物理的操作ができないこと」を示している。例えば例 (10a) のような場合、「飲み込む」前、即ち問題の事態がまだ認知主体の領域(またはその近く)に存在するときは、うどんなどの食べ物に対して「食べる」のような物理的な操作が可能であるが、「飲み込んだ」後は同様の操作はできなくなる。「遠/近」の S モード (図 3 参照) に照らしていえば、このプロセスは事態が認知主体の領域の近くから遠くに離れていくプロセス、即ち“去”のプロセスと一致する。同様のことは例 (10b) についてもいえる。

3・2・3 「意識的かつ正常なことは認知主体の領域」

3・2・1 と 3・2・2 では認知主体の領域に関する二つの特質、即ち「知覚できることは認知主体の領域」と「物理的操作のできることは認知主体の領域」についてみたが、本節では意識的かつ正常なことは認知主体の領域であるということについてみる。

(11) 天黑下来, 范睢才从昏迷中醒过来…… (→*去)

[空が暗くなってきて范睢はやっと昏睡状態から意識を取り戻した…]

(12) 我妈一听说我在她不在家的时候就娶了张辛, 气得差一点儿晕过去。(→*来)

[母は彼女がいないときに私が張辛と結婚したのを知り、怒りのあまり気を失いそうになった。]

例 (11) はある人物が非正常な昏迷状態から意識のある正常な状態に戻ることを表すのに対し、例 (12) は逆に当該人物が意識のある正常な状態から非正常な昏迷状態に戻ることを表す。そして言語表現として前者は“过来”、後者は“过去”がそれぞれ用いられている。このことは認知主体の領域が意識的かつ正常なことであることを表しているといえる。

それでは、認知主体の領域はなぜ意識的かつ正常なことである必要があるのだろうか。その理由はやはり中国話話者の事態に対する自己中心的な捉え方にあると考えられる。つまり、我々が日常生活において何かをするときには意識を伴っている状態の方が普通(ないし無標の状態)であり、事態を眺め、言語化する際に、認知主体の領域をわざわざ有標の方に設置するのは非常に効率の悪いことである。従って意識的かつ正常なことを認知主体の領域にすること自体にいわば自己中心的なや

り方が反映されているといえる。

3・2・4 「よいことは認知主体の領域」

前節では「意識的かつ正常なことは認知主体の領域」の具体例についてみたが、例 (13) が示しているように「よいことは認知主体の領域」を表す言語事例も存在する。

(13) a. 魏国的势力强大起来了, 但是它的内部却发生了动乱。(→*去³)

[魏の国の勢力は大きくなったが、その内部で動乱が起こった。]

b. 先是寻欢作乐, 沾染上恶习, 最后堕落下去。(→*来)

[まずは女遊びをし、悪習に手を染めた後、墮落した]

「よいことは認知主体の領域」という発想は中国語固有のものではなく、出原 2009 では英語などにも同様の発想が存在することが指摘されている。

(14) a. go bad, go bankrupt, go blind, go mad, go sour.

b. go armed, go hungry, go in rags, go naked, go thirsty.

(出原 2009 : 10)

「よいことは認知主体の領域」、「わるいことはその他の領域」という発想はやはり自己中心的な発想といわざるを得ない。

3・2・5 「いま・ここは認知主体の領域」

(15) a. 除了中国, 还有些地区也出现过算盘, 但都没有流传下来。(→*去)

[中国以外の地域にも算盤というものが出現したことがあるが、ただいずれも今日まで伝わってきていない。]

b. 祖国源远流长的文化传统, 一定可以万古不息地流传下去。(→*来)

[祖国の長い歴史を持つ伝統文化はきっと後世にまで代々伝わっていくだろう。]

自己中心的な事態の捉え方をつきつめれば、認知主体が「いま・ここ」を基準点にして事態を眺めて言語化することに他ならない。また、例えば“上个星期”[先週]“下个星期”[来週]などが表すように、中国語には《時間は上から下へ流れるものである》というメタファーが

存在する。この二つが組み合わさると過去から現在は“下来”(例(15a))、現在から未来は“下去”(例(15b))がそれぞれ用いられることが容易に理解できるだろう⁴。

4. まとめと展望

本稿では方向補語を用いて外界における様々な事態を言語化する際に、“来”が選ばれるが、“去”は選ばれないケース、もしくはその逆のケースを取り上げてそれぞれの制約について考察した。考察の結果、この種の制約は中国語話者の事態に対する自己中心的な把握の仕方と関わっていることが明らかになった。また、自己中心的な事態把握の仕方を反映する認知主体の領域に関するいくつかの特質についても考察した。具体的には(1)「知覚できることは認知主体の領域」、(2)「物理的な操作のできることは認知主体の領域」、(3)「意識的かつ正常なことは認知主体の領域」、(4)「よいことは認知主体の領域」、(5)「いま・ここは認知主体の領域」の五つに分けて検討した。

これまで方向補語に関する研究については主観的事態把握並びに整列対応の観点から考察したものは管見の限りみられない。そういう意味では本稿は方向補語の研究に関する新しい試みであるといえる。今後この観点からの更なる包括的な考察が期待される。

注

- 1 自己中心的な(egocentric)事態把握については池上2003、2004、2006などを参照されたい。
- 2 鍋島2009:600はイメージ・スキーマのSモードを「話者がいるにもかかわらず、背景化され対象化されていない認知形式」と定義している。また、Sモードの「S」は、Subjective(主観的)、Situating(状況的)、Self-centered(自己中心的)の意味であるのに対し、Oモードの「O」はObjective(客観的)、Object permanent(物体永続的)、Ontological(存在論的)の意味であると説明している。なおイメージ・スキーマのSモードとOモードについてはさらに鍋島2002などを参照されたい。
- 3 現代中国語には“起来”に対して“*起去”という表現はそもそも存在しないが、仮に存在するとしても「よいことは認知主体の領域」という制約により、この種の置き換えは依然として認められない。
- 4 方向補語“下来”“下去”の時間的用法については杉村1983でも触れられているが、なぜ例(15)のようなケースでは“来”“去”の置き換えが認められないのか、その制約については言及されていない。

主要参考文献

- 池上嘉彦：言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)、(2)、山梨正明ほか(編)『認知言語学論考No.3/No.4』、ひつじ書房、東京、2003/2004。
- 池上嘉彦：『英語の感覚・日本語の感覚』、日本放送出版協会、東京、2006。
- 出原健一：「Goと「行く」—志向性の観点から—」、『彦根論叢』第378号、滋賀大学、2009。
- 杉村博文：方向補語“过”の意味、『中国語』1月号、内山書店、東京、2000。
- 鍋島弘治朗：メタファーと意味の構造的—プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から—、山梨正明他(編)『認知言語学論考』No.2、ひつじ書房、東京、2002。
- 鍋島弘治朗：言語学的アラインメント試論—写像(mapping)の骨格としての整列(alignment)—、『英文学論集』第43号、関西大学英文学会、2003。
- 鍋島弘治朗：認知言語理論におけるイメージ・スキーマと主観性—発達理論およびメタファー理論との関連から、『日本認知言語学会論文集』第9巻、2009。
- 本多啓：「見えない自分、言えない自分：言語にあらわれた自己知覚」、『現代思想』11月号、東京、青土社、1994。
- 丸尾誠『現代中国語の空間移動表現に関する研究』、白帝社、東京、2005。
- 丸尾誠：「中国語の方向補語について—日本人学習者にとって分かりにくい点」、中国語話者のための日本語教育研究会(2009年12月19日、於名古屋大学)、2009。
- 刘月华：《趋向补语通释》、北京语言文化大学出版社、北京、1998。
- 刘月华等：《实用现代汉语语法》、外语教学与研究出版社、北京、1983。
- 杉村博文：试论趋向补语“-下”“-下来”“-下去”的引申用法、『语言教学与研究』第4期、1983。
- 中国語用例出典：北京大学漢語語言学研究中心 CCL 語料庫

(受理 平成23年3月19日)